

『1、2の3で恋をする』

著：高将にぐん

ill：茶々ごま

『この世界に、本当の闇(やみ)なんかないよ』

少し笑いを含んだ声で、ソイツは静かに言い切った。進学校でもない高校に、何故か紛(まぎ)れ込んだ天才少年。確かに奴の言う通り、閉じた瞼(まぶた)の内側には、深い黒の上に淡い白と鮮やかな赤が砂嵐のようにちかちかと瞬(またた)いていた。

それは、今から十年前のこと。まだ幼かった、俺達二人の。

「それじゃあ、数えるからね？ ワーン、ツー、スリー！」

あの頃より少しだけ低くなった、子供のようにはしゃいだ声。俺は目を閉じじっと突っ立ったまま、奴の次の言葉を待った。

「よし、もういいよ。それじゃサトシ君、ゆっくり、目を開けてみて？」

言われた通り、そうっと瞼を上げてみる。目の前に立っているのは、栗(くり)色(いろ)の髪に寝(ね)癖(ぐせ)をくしゃりにつけたままの、ひよろつとした白衣の男だった。

猫(ねこ)実(ざね)雅(まさ)紀(き)。高校時代の同級生。

ごく平凡な大学に進み、潰(つぶ)れかけの会社に辛(かろ)うじて就職した、何の取り柄も特徴もない俺とは、全く正反対の男。高校を出た途端海外留学し、向こうのナントカ大学をあっという間に卒業したかと思えば博士号だか何だか取得して、帰国した現在は日米の企業が共同出資している大手薬学研究所に所属している。

完璧なインドア派なのに背だけはひよろひよろ高くって、俺より十センチ以上は細長い。年明けには二十八になるというのに、おっきな目をして童顔で、高校時代と見た目はまるで変わってない。最後に洗ったのはいつなのか、真っ白だったはずの白衣は正体不明のカラフルな染みをつけていて、しわくちゃのよれよれだ。そのくせ無(む)駄(だ)にファッションセンスだけはいいものだから、新(しん)宿(じゅく)のホストでも衣装負けしそうな派手な紫のストライプのシャツだってさらりと自然に着こなしてるし、オタクっぽくなりかねない分厚いレンズの眼鏡(めがね)すら、スマートなデザインのフレームにより、むしろお洒落(しゃれ)アイテムに見えてしまう。

科学者である本人はさっぱり信じていないが、B型のマイペースさとみずがめ座の奇人変人具合と亥(い)年(とし)の猪(ちょ)突(とつ)猛(もう)進(しん)つぷりを見事に兼ね備えているコイツを見ていると、占いて結構当たってるんじゃないの、なんて俺は思ってる。子供みたいに我(わが)侷(まま)で、子供みたいに天(てん)真(しん)爛(らん)漫(まん)で、子供みたいに空気を読まない……要するに、大人げなくて面倒くさい男。

そんな昔馴染(なじ)みを前に、どうして。

どうして俺は、オトメみたいにどきどきと、心臓が弾(はじ)けそうになってるんだ!?

と、奴は軽く腰を屈(かが)めて、立ちんぼになっていた俺の顔をずいと覗(のぞ)き込んできた。散髪すらしばらくサボっているらしい少し伸びた前髪が、俺の鼻先をくすぐる程に間近に迫(せま)る。途(と)端(たん)に何故か俺の顔は急激に熱くなり、変な汗まで噴き出してきた。そんな俺の反応に、奴はにんまり、オムライスを前にした子供みた

いな顔になった。

「ん、上出来、上出来！ いいね～、いい感じじゃない？」

「おいっ、猫！ てっめえ、一体俺に何を……！」

「何って勿(もち)論(ろん)、ち・け・ん」

人差し指をぴんと立て、語尾に音符マークが付きそうな弾んだ声で告げられて、俺は目を白黒させた。

「ちけん……？」

「そう、治(ち)験(けん)。要するに、臨(りん)床(しょう)試(し)験(けん)。君には、僕が開発した新薬を投与した」

「……っ！」

ショックを受けたのは、猫実のあつけらかんとした告白の内容にではない。「そんなこつたろうと思った」と納得した、自分自身に、だ。

俺はがっくりと項(うな)垂(だ)れ、片方の手のひらで顔を覆(おお)うと、よろよろと椅子(い)子(す)に座り込んだ。言葉も出ない俺に代わって、キャスター付きの古びた椅子が、キュイツとか細い悲鳴を上げた。

半年ぶりの電話で突然呼び出され、仕事帰りにこの研究室に立ち寄ったのがほんの五分前。他人に気を遣うなんて一切したことのないコイツが、いそいそとコーヒーを淹(い)れてくれた時にも、アヤシイ空気は感じていた。何か下心があるんじゃないかと勘(かん)ぐっていた。それでもうきうきと「美(お)味(い)しい？ ねえ、美味しい？」、なあって顔を覗き込まれて、ああ、コイツも可愛いところあるじゃんなんて、思った俺が馬鹿だった。

「まさか、毒を盛られてたとはな……」

「人間き悪いなあ、薬だよ、く・す・り！」

人差し指をぴん、ぴん、ぴんと弾ませながら、猫実は子供みたいに唇(くちびる)を尖(とが)らせた。どうしてお前が拗(す)ねるんだ、怒りたいのはこっちだろうが。

俺はくしゃくしゃと短い前髪をかき上げると、ため息交じりに吐き捨てた。

「で？ これは何の薬なんだ？」

「惚(ほ)れ薬！ ね、どう？ 僕のこと、好きになってきた？」

「……っ!!」

俺のボキャブラリーにあるありったけの罵(ば)倒(とう)の言葉が一気に溢(あふ)れてもつれて絡(から)まって、むしろ喉(のど)から出なくなった。そんな俺を気にする風も無く、猫実は小(こ)躍(おど)りしかねない勢いで両手を合わせてきやっきやとはしゃいでまくしたてた。

「少子化対策にね、僕が日本のキューピッドになろうと思って！ 恋に落ちて食欲がなくなったり気分が高揚するのは、脳内物質フェニルエチルアミンによるものなんだ。この物質はその特性から、血圧を上げる薬や抗(こう)鬱(うつ)剤(ざい)、肥満治療薬なんかにも活用されている。その効果を更(さら)に高めて、媚(び)薬(やく)に進化させた、つてワケ。視覚から視床に刺激が伝わって扁桃(へんとう)体から前頭葉に情報が伝(でん)播(ぱ)され……えーとつまりね、飲み終わって初めて見た相手に心奪われるはずなんだ。ね、ね、どう？ サトシ君、今、僕にどきどきしてる？」

「……っざ、けんな！」

叫んで振り上げた拳(こぶし)が唸(うな)りを上げて振り下ろされ——けれど猫実の鼻

先でぴたりと止まった。

震える握(にぎ)り拳の向こう、分厚い眼鏡の奥で猫実の目が、にんまりと細められる。妖(よう)艶(えん)に引き上げられる薄い唇。まるで——まるで俺が、奴を殴(なぐ)ることなど出来ない、分かり切っていたかのように。

「——ねえ。僕のこと、好きだよな？」

しつとりと艶(つや)のある囁(ささや)きが、俺の耳を侵食する。

どきん、どきん、胸の内側から切なげに俺を叩(たた)く抗(あらが)えない気持ち。俺はくしゃくしゃと眉を歪(ゆが)めると、力無く拳を下ろして、火(ほ)照(て)りっぱなしの顔を伏せた。

「……これ、いつ、効果切れんの」

「それを含めての検体だから！」

ぼそぼそと囁いた俺に、けろりとして猫実が笑い掛ける。その顔に、悪意は一(いっ)片(ぺん)のかけらも無い。

俺は奥歯を嚙(か)み締(し)めると、絞(しぼ)り出すようにして震える声を奴に投げた。

「なんで、俺、なんだよ」

「僕の身近な人物で、一番研究しやすいの、君でしょ？ それに男性同士なら、薬が上手く効いたところで、間違いが起こりようが無いし！」

心臓が、引き裂かれるように痛い。

お手軽な相手。使いやすい相手。それが、コイツにとっての俺。その事実、何故かひどく泣きたくなる。しかも、「男同士なら間違いが起こらない」って。なんだよそれ。人をなんだと思ってるんだよ。

俺の中に植え付けられたこの熱は、「間違い」だって言うのかよ。

「どんなに迫られたところで、僕が君を抱くことはまず、無いもんね」

「って、何勝手に俺が迫ることになってんだよ！ つーか、俺が抱かれる側なのか!？」

肩を震わせて睨(にら)み続けるしか出来ない俺に、奴はにこっと無邪気に笑うと、白衣のポケットに両手を突っ込んでぴんと長い腕を伸ばした。

「それにね、僕の極秘の研究を打ち明けるに当たって、誰よりも信頼出来る人って思ったら、サトシ君しか浮かばなかったんだ」

どきん、と心臓が高く跳ねる。顔がますます熱くなる。

ずきずきと、治まることなく痛む左胸。

お前は確かに天才だよ、猫実。こんなに良く効く薬を投与されて、俺はこれから、どうしたらいいんだ？

本文 p10～16 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>